

最優秀賞

大田区立大森第六中学校 石川 蒼翔

私は、ユネスコスクールの生徒、そして生徒会の一員として SDGs のことについて様々な方法で学びを得てきた。

特に自分を成長させたのは、総合の時間に行われた「シビック・アクション」という授業だ。「シビック・アクション」とは市民が社会のために行う活動のことで、この授業では1年を通して4~6人ほどのグループごとに行うアクションを決め、それぞれの方法で実行した。テーマは平和・気候変動・食品ロスの3つがあり、私は食品ロスの削減に向けた活動をするグループだった。地域と協力する場合の交渉なども自分たちで行い、生徒主体で活動が行われた。

私のグループでは動画を作成し小学生に見てもらおうという活動を行った。仕事分担や外部への交渉など、リーダーをするうえで多くの学びがあった。字幕を入れたり、イラストを使用するなど、児童に関心や理解を深めてもらうために工夫した。

また、小学校に直接電話をかけて連絡を行ったり、小学校の校長先生と1対1で提案や協議を行うなどの外部との連携から、社会に出て社会のために活動することの難しさも学んだ。そうして小学生に見てもらい、アンケートを行った結果、「食品ロスについて実感が湧いた」など、児童の80%ほどが関心を持ってアンケートに答えてくれた。

また、教科の探究学習では、今までの研究やデータから未来のことについて考え、ゴミの削減など今すぐにやるべきことを知った。そのほかにも、ボランティア活動等を通して、よりよい世界や地球を作るために必要なことを学んだ。このような教育を行う学校が増えていくことで、将来の日本を担う人々の育成が高レベルで行われ、先進国の中でも遅れを取っている日本を変えられると確信している。そう感じさせられるほど、SDG4の重要性を学び、そして活用できるような人間に育ててくれたユネスコスクール。ここで得た経験や知識は、社会貢献として世界に還元しなくてはならないと思う。

優秀賞

国本小学校 卒業生 石塚 あり沙

【人の想いを届ける活動】

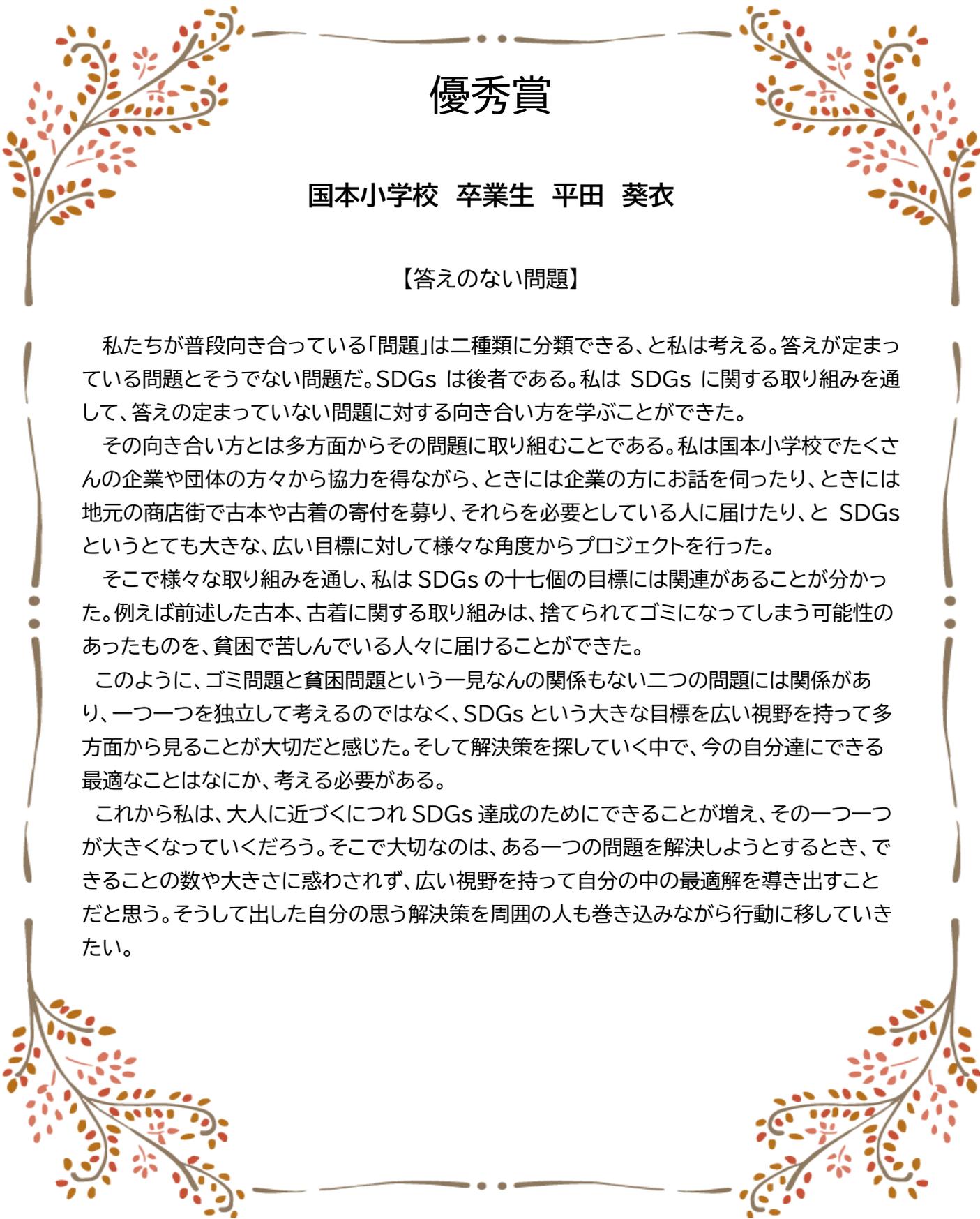
私が、小学校生活の中で一番力と時間を費やした活動は「Re-Project」である。Re-Pro とは、企業と協力して使われなくなった物をリサイクルするというものだ。

六年生になった四月から約八か月間、六年生が中心となり学校全体で取り組んできた。先生からは大まかな内容を伝えられただけで殆ど指示は無く、生徒主体で進めていった。そのため、ただ単に SDGs という言葉のひとり歩きにならないように、どんな事を目的にこの活動をしているか、そのために何が必要か、具体的に示しながら校内だけでなく、学園全体や地域の商店街の方や生徒の保護者向けにチラシを自分達で作成して配ったり、Re-Pro の活動内容の紹介動画を作って、廊下や教室で流したりした。個人だけでなく学園全体、そして地域全体を巻き込みながら SDGs に対する意識を高めた上で、Re-Project に取り組んだ。

実際に文化祭では、私たちの呼びかけで集まった使い終わったジップロック・カルピスのボトル・テープの芯・文房具・着られなくなった服を回収し、それによって興味をもってもらえた人に、作成した QR コードを読み込んでもらい、その資料でその場でプレゼンをしたりした。私たちが作成したチラシを見て、足を運んでくれた来場者の方がいてとても嬉しかった。

そしてそれ以上に、SDGs の取り組みを行うことにあたって、協力してくれた方々への感謝、自分自身で理解すること、それをどう人に伝えるか、言うのとやるのとは違い実際にやるのがどれだけ大変で時間を費やすか、どれだけ考えが集まってできているのかを知った。一人では無力だということを思い知った。たくさんの方が同じベクトルを持って取り組んでいたからこそできるプロジェクトだと強く感じた。

私たちが人の想いを乗せた貨物だとしたら、Re-Pro は私たちが通る道のようなものであった。



優秀賞

国本小学校 卒業生 平田 葵衣

【答えのない問題】

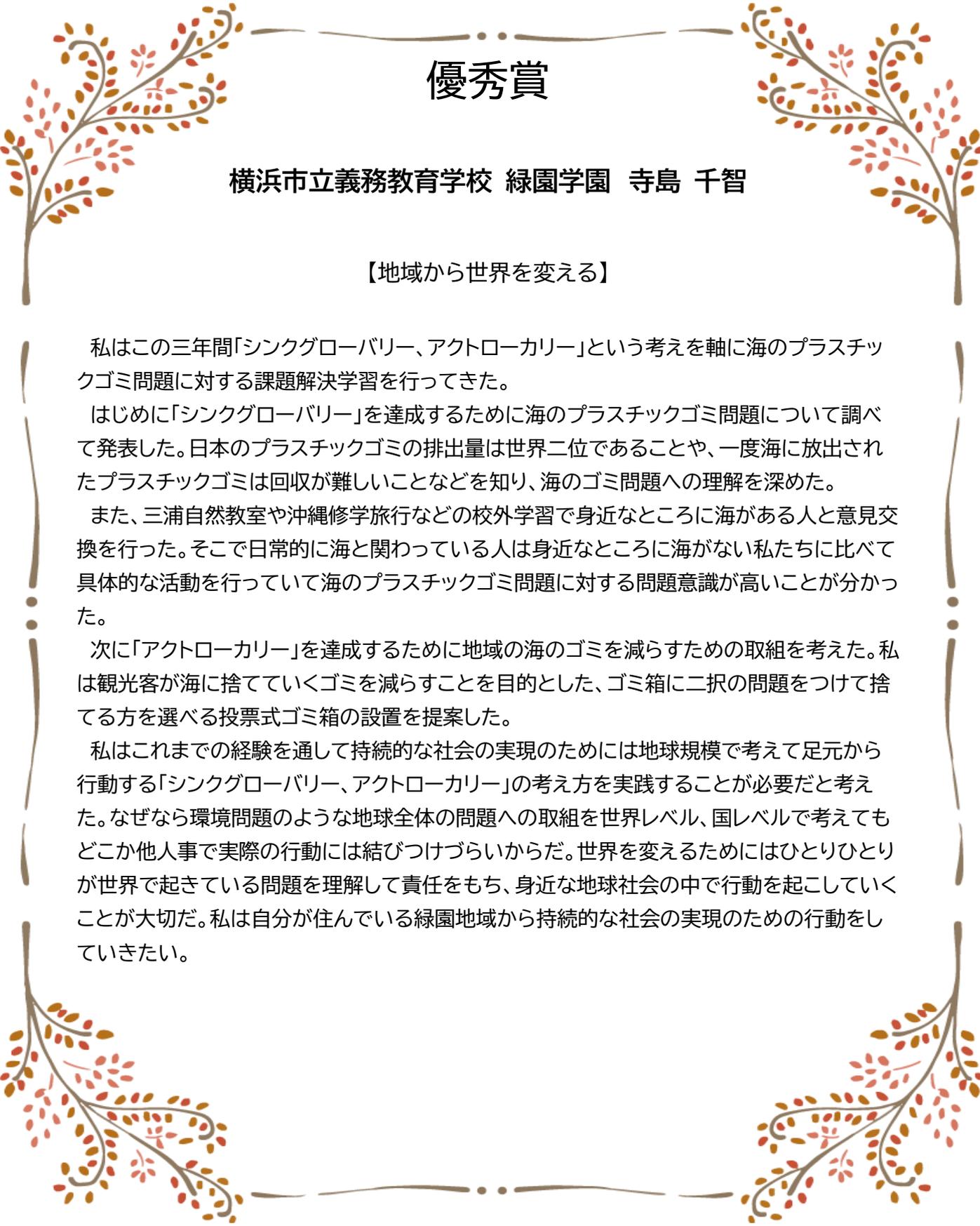
私たちが普段向き合っている「問題」は二種類に分類できる、と私は考える。答えが定まっている問題とそうでない問題だ。SDGs は後者である。私は SDGs に関する取り組みを通して、答えの定まっていない問題に対する向き合い方を学ぶことができた。

その向き合い方とは多方面からその問題に取り組むことである。私は国本小学校でたくさんの企業や団体の方々から協力を得ながら、ときには企業の方にお話を伺ったり、ときには地元の商店街で古本や古着の寄付を募り、それらを必要としている人に届けたり、と SDGs というとても大きな、広い目標に対して様々な角度からプロジェクトを行った。

そこで様々な取り組みを通し、私は SDGs の十七個の目標には関連があることが分かった。例えば前述した古本、古着に関する取り組みは、捨てられてゴミになってしまう可能性のあったものを、貧困で苦しんでいる人々に届けることができた。

このように、ゴミ問題と貧困問題という一見なんの関係もない二つの問題には関係があり、一つ一つを独立して考えるのではなく、SDGs という大きな目標を広い視野を持って多方面から見ることが大切だと感じた。そして解決策を探していく中で、今の自分達にできる最適なことはなにか、考える必要がある。

これから私は、大人に近づくにつれ SDGs 達成のためにできることが増え、その一つ一つが大きくなっていくだろう。そこで大切なのは、ある一つの問題を解決しようとするとき、できることの数や大きさに惑わされず、広い視野を持って自分の中の最適解を導き出すことだと思う。そうして出した自分の思う解決策を周囲の人も巻き込みながら行動に移していきたい。



優秀賞

横浜市立義務教育学校 緑園学園 寺島 千智

【地域から世界を変える】

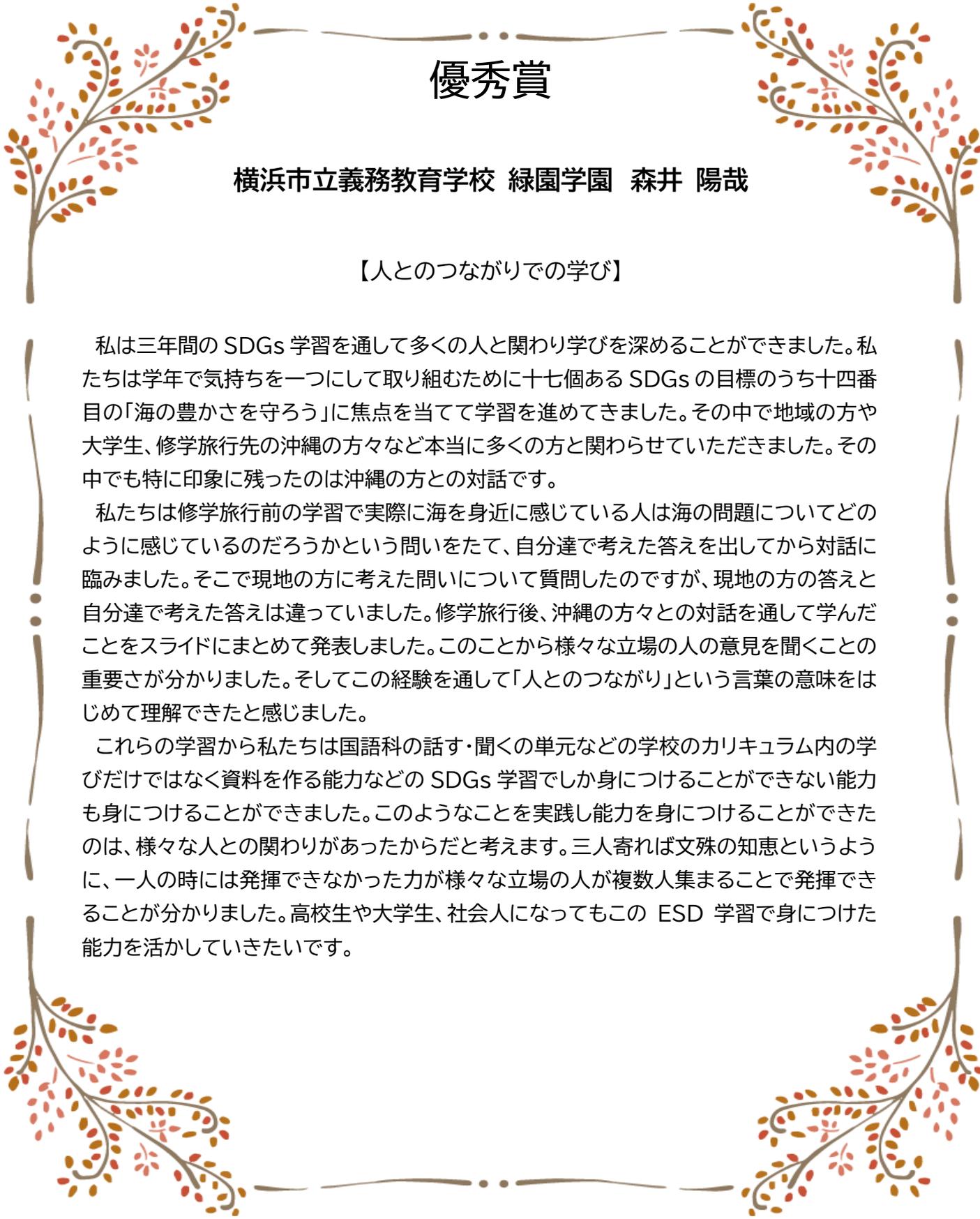
私はこの三年間「シンクグローバリー、アクトローカリー」という考えを軸に海のプラスチックゴミ問題に対する課題解決学習を行ってきた。

はじめに「シンクグローバリー」を達成するために海のプラスチックゴミ問題について調べて発表した。日本のプラスチックゴミの排出量は世界二位であることや、一度海に放出されたプラスチックゴミは回収が難しいことなどを知り、海のゴミ問題への理解を深めた。

また、三浦自然教室や沖縄修学旅行などの校外学習で身近なところに海がある人と意見交換を行った。そこで日常的に海と関わっている人は身近なところに海がない私たちに比べて具体的な活動を行っていて海のプラスチックゴミ問題に対する問題意識が高いことが分かった。

次に「アクトローカリー」を達成するために地域の海のゴミを減らすための取組を考えた。私は観光客が海に捨てていくゴミを減らすことを目的とした、ゴミ箱に二択の問題をつけて捨てる方を選べる投票式ゴミ箱の設置を提案した。

私はこれまでの経験を通して持続的な社会の実現のためには地球規模で考えて足元から行動する「シンクグローバリー、アクトローカリー」の考え方を実践することが必要だと考えた。なぜなら環境問題のような地球全体の問題への取組を世界レベル、国レベルで考えてもどこか他人事で実際の行動には結びつけづらいからだ。世界を変えるためにはひとりひとりが世界で起きている問題を理解して責任をもち、身近な地球社会の中で行動を起こしていくことが大切だ。私は自分が住んでいる緑園地域から持続的な社会の実現のための行動をしていきたい。



優秀賞

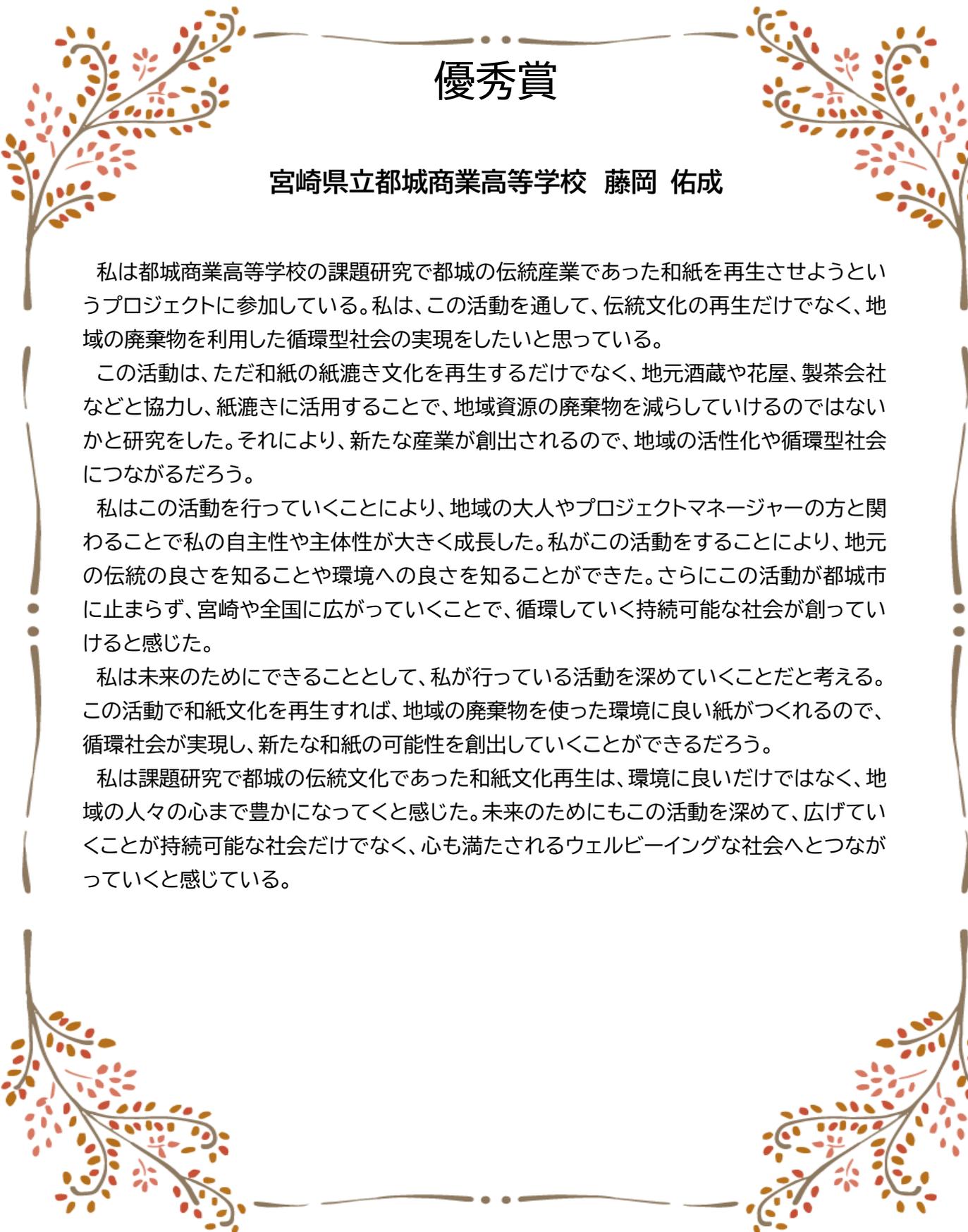
横浜市立義務教育学校 緑園学園 森井 陽哉

【人とのつながりでの学び】

私は三年間の SDGs 学習を通して多くの人と関わり学びを深めることができました。私たちは学年で気持ちを一つにして取り組むために十七個ある SDGs の目標のうち十四番目の「海の豊かさを守ろう」に焦点を当てて学習を進めてきました。その中で地域の方や大学生、修学旅行先の沖縄の方々など本当に多くの方と関わらせていただきました。その中でも特に印象に残ったのは沖縄の方との対話です。

私たちは修学旅行前の学習で実際に海を身近に感じている人は海の問題についてどのように感じているのだろうかという問いをたて、自分達で考えた答えを出してから対話に臨みました。そこで現地の方に考えた問いについて質問したのですが、現地の方の答えと自分達で考えた答えは違っていました。修学旅行後、沖縄の方々との対話を通して学んだことをスライドにまとめて発表しました。このことから様々な立場の人の意見を聞くことの重要性が分かりました。そしてこの経験を通して「人とのつながり」という言葉の意味をはじめ理解できたと感じました。

これらの学習から私たちは国語科の話す・聞くの単元などの学校のカリキュラム内の学びだけではなく資料を作る能力などの SDGs 学習でしか身につけることができない能力も身につけることができました。このようなことを実践し能力を身につけることができたのは、様々な人との関わりがあったからだと考えます。三人寄れば文殊の知恵というように、一人の時には発揮できなかった力が様々な立場の人が複数人集まることで発揮できることが分かりました。高校生や大学生、社会人になってもこの ESD 学習で身につけた能力を活かしていきたいです。



優秀賞

宮崎県立都城商業高等学校 藤岡 佑成

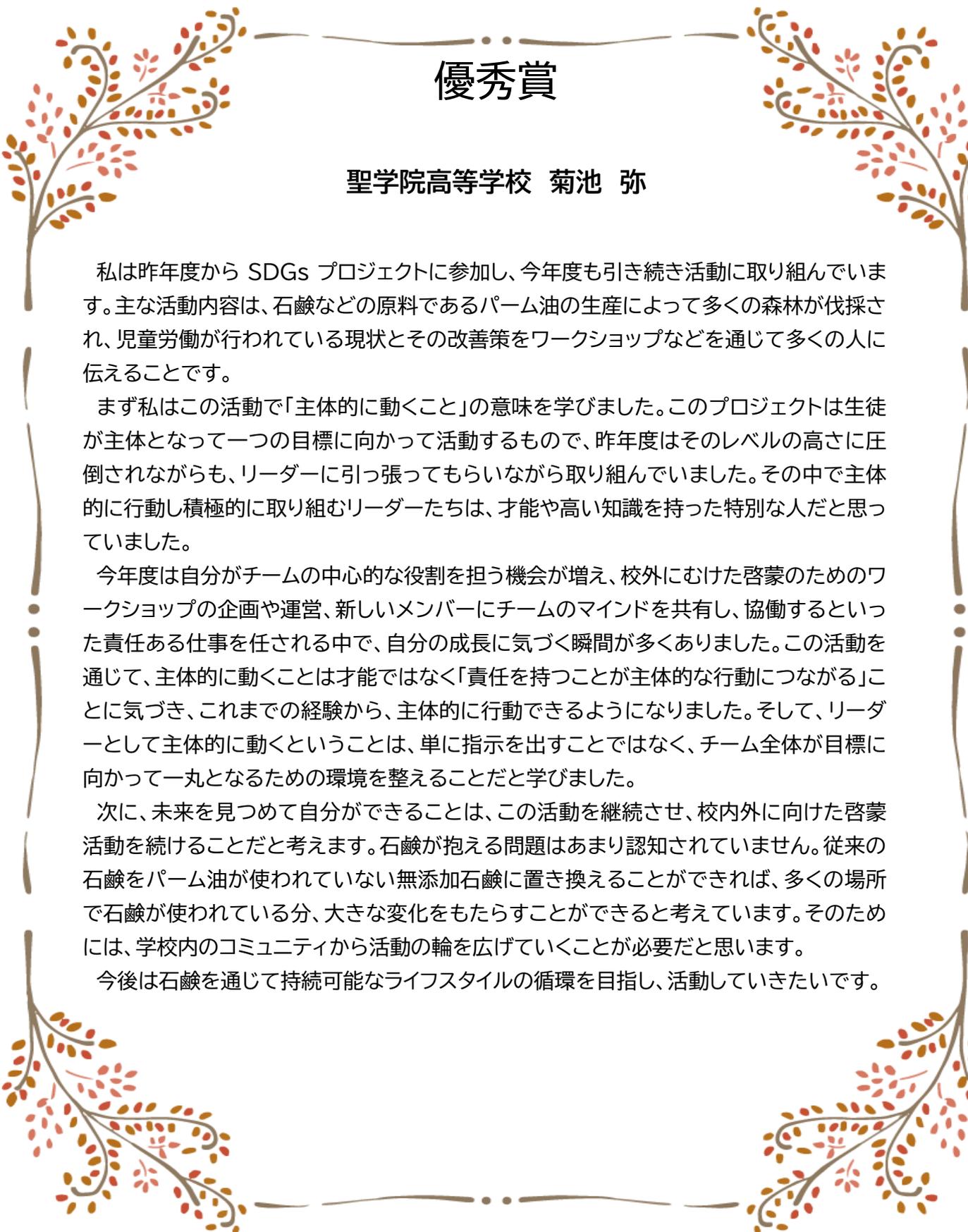
私は都城商業高等学校の課題研究で都城の伝統産業であった和紙を再生させようというプロジェクトに参加している。私は、この活動を通して、伝統文化の再生だけでなく、地域の廃棄物を利用した循環型社会の実現をしたいと思っている。

この活動は、ただ和紙の紙漉き文化を再生するだけでなく、地元酒蔵や花屋、製茶会社などと協力し、紙漉きに活用することで、地域資源の廃棄物を減らしていけるのではないかと研究をした。それにより、新たな産業が創出されるので、地域の活性化や循環型社会につながるだろう。

私はこの活動を行っていくことにより、地域の大人やプロジェクトマネージャーの方と関わることで私の自主性や主体性が大きく成長した。私がこの活動をする事により、地元の伝統の良さを知ることや環境への良さを知ることができた。さらにこの活動が都城市に止まらず、宮崎や全国に広がっていくことで、循環していく持続可能な社会が創っていると感じた。

私は未来のためにできることとして、私が行っている活動を深めていくことだと考える。この活動で和紙文化を再生すれば、地域の廃棄物を使った環境に良い紙が作れるので、循環社会が実現し、新たな和紙の可能性を創出していくことができるだろう。

私は課題研究で都城の伝統文化であった和紙文化再生は、環境に良いだけでなく、地域の人々の心まで豊かになってくと感じた。未来のためにもこの活動を深めて、広げていくことが持続可能な社会だけでなく、心も満たされるウェルビーイングな社会へとつながっていくと感じている。



優秀賞

聖学院高等学校 菊池 弥

私は昨年度から SDGs プロジェクトに参加し、今年度も引き続き活動に取り組んでいます。主な活動内容は、石鹼などの原料であるパーム油の生産によって多くの森林が伐採され、児童労働が行われている現状とその改善策をワークショップなどを通じて多くの人に伝えることです。

まず私はこの活動で「主体的に動くこと」の意味を学びました。このプロジェクトは生徒が主体となって一つの目標に向かって活動するもので、昨年度はそのレベルの高さに圧倒されながらも、リーダーに引っ張ってもらいながら取り組んでいました。その中で主体的に行動し積極的に取り組むリーダーたちは、才能や高い知識を持った特別な人だと思っていました。

今年度は自分がチームの中心的な役割を担う機会が増え、校外にむけた啓蒙のためのワークショップの企画や運営、新しいメンバーにチームのマインドを共有し、協働するといった責任ある仕事を任される中で、自分の成長に気づく瞬間が多くありました。この活動を通じて、主体的に動くことは才能ではなく「責任を持つことが主体的な行動につながる」ことに気づき、これまでの経験から、主体的に行動できるようになりました。そして、リーダーとして主体的に動くということは、単に指示を出すことではなく、チーム全体が目標に向かって一丸となるための環境を整えることだと学びました。

次に、未来を見つめて自分ができることは、この活動を継続させ、校内外に向けた啓蒙活動を続けることだと考えます。石鹼が抱える問題はあまり認知されていません。従来の石鹼をパーム油が使われていない無添加石鹼に置き換えることができれば、多くの場所で石鹼が使われている分、大きな変化をもたらすことができると考えています。そのためには、学校内のコミュニティから活動の輪を広げていくことが必要だと思います。

今後は石鹼を通じて持続可能なライフスタイルの循環を目指し、活動していきたいです。

優秀賞

名古屋経済大学市邨高等学校 今泉 花乃香

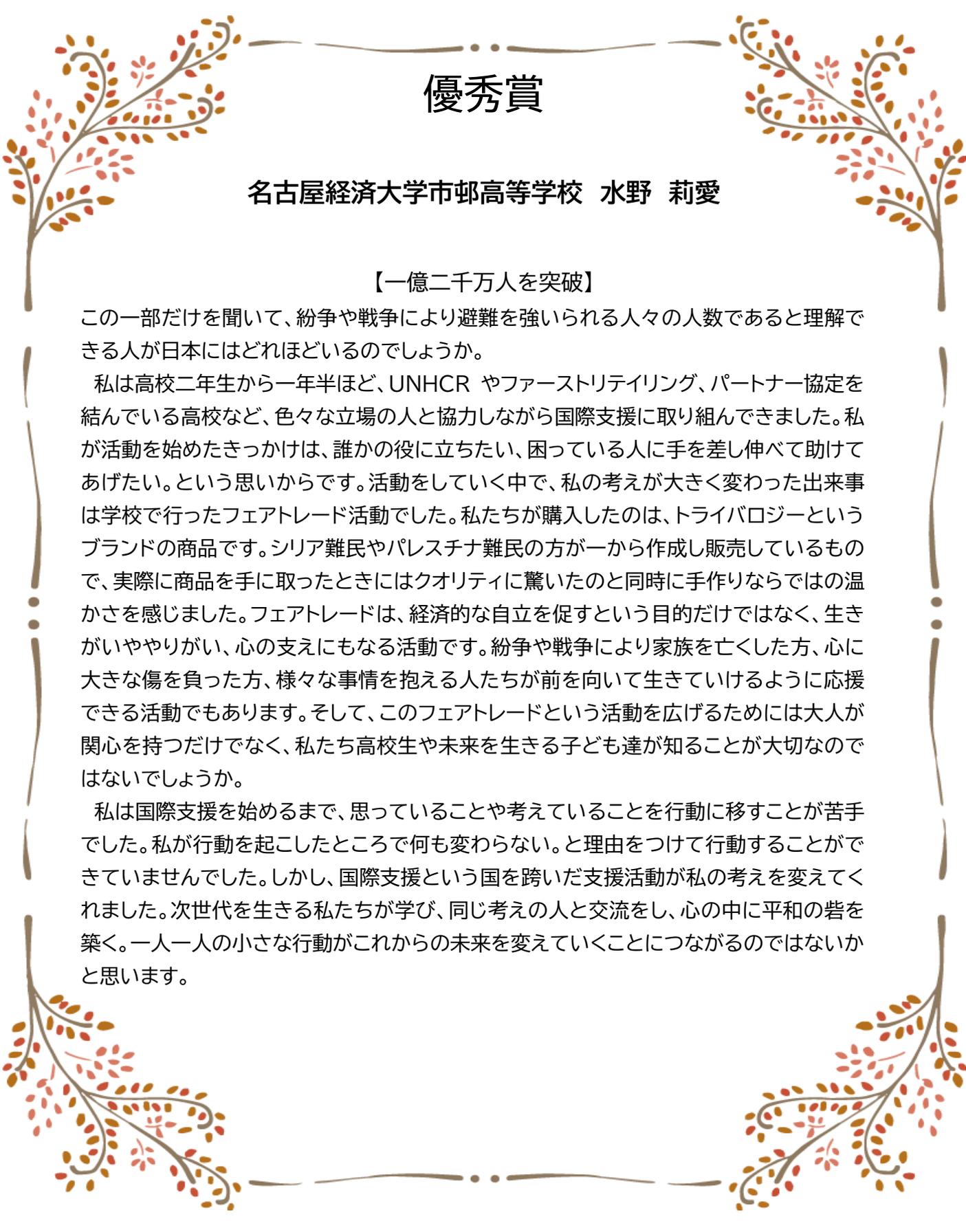
【私にできること】

私は服のチカラプロジェクト、カンボジアの貧困地域の公立小学校支援、中東難民女性の自立支援を様々な人々と協力して行ってきた。様々な人というのは高校の生徒だけではなく、専門家や地域の方々、埼玉県、韓国、台湾等の他校の生徒だ。

中東難民女性支援では難民女性が作った商品を紹介、販売する活動を行った。もちろん私自身も商品を購入した。厳しい生活を送る難民女性を少しでも助けたいと思ったからだ。その後、難民女性やデザイナーの方々が喜んでいる事を知った時、私はこの活動をしていて良かったと心から思った。直接現地に向かい、支援することはできなくても、商品を購入することは誰にでもできる。また、商品を購入することは経済的な支援だけではなく精神面での支えにもなる。生きがいの人々にとってどれほど重要なかが身にしみてわかった。

そして私自身が人間として特に成長したと思うのは、台湾でのリーダーズ研修だ。台湾の高校生との交流では台湾の文化、生活を実際に見て、体験した。この活動の目的は心の中に平和の砦を築くこと。つまり国境を越えて支援を行う仲間と交流をし、学びを得ることだった。初めての海外や慣れない土地、食事に戸惑うこともあったが、他者を理解しリスペクトし合うことの大切さを学んだ。価値観や文化の違いは大昔から対立を招いてきた根源でもある。しかし国が違えば文化も言葉も違うのは当然だ。自身のやり方を無理やり通そうとするのではなく、違いを互いに理解することが大切なのではないだろうか。

世界のため、誰かのためにできる事とは何だろう。もし私が超有名インフルエンサーやどこかの大富豪だったら、部屋から一步も動かず自分の言葉一つで世界を動かせるかもしれないが、現実はそう甘くはない。そんな自分にできることは何なのかを考え、行動する。これは私が大切にしている考えだ。そしてこの事を考え続けることが大切だと私は思う。



優秀賞

名古屋経済大学市邨高等学校 水野 莉愛

【一億二千万人を突破】

この一部だけを聞いて、紛争や戦争により避難を強いられる人々の人数であると理解できる人が日本にはどれほどいるのでしょうか。

私は高校二年生から一年半ほど、UNHCR やファーストリテイリング、パートナー協定を結んでいる高校など、色々な立場の人と協力しながら国際支援に取り組んできました。私が活動を始めたきっかけは、誰かの役に立ちたい、困っている人に手を差し伸べて助けてあげたい。という思いからです。活動をしていく中で、私の考えが大きく変わった出来事は学校で行ったフェアトレード活動でした。私たちが購入したのは、トライバロジーというブランドの商品です。シリア難民やパレスチナ難民の方が一から作成し販売しているもので、実際に商品を手にとったときにはクオリティに驚いたのと同時に手作りならではの温かさを感じました。フェアトレードは、経済的な自立を促すという目的だけではなく、生きがいややりがい、心の支えにもなる活動です。紛争や戦争により家族を亡くした方、心に大きな傷を負った方、様々な事情を抱える人たちが前を向いて生きていけるように応援できる活動でもあります。そして、このフェアトレードという活動を広げるためには大人が関心を持つだけでなく、私たち高校生や未来を生きる子ども達を知ることが大切なのではないでしょうか。

私は国際支援を始めるまで、思っていることや考えていることを行動に移すことが苦手でした。私が行動を起こしたところで何も変わらない。と理由をつけて行動することができていませんでした。しかし、国際支援という国を跨いだ支援活動が私の考えを変えてくれました。次世代を生きる私たちが学び、同じ考えの人と交流をし、心の中に平和の砦を築く。一人一人の小さな行動がこれからの未来を変えていくことにつながるのではないかと思います。